

令和 5 年 5 月 22 日現在

機関番号：32728

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13009

研究課題名（和文）外傷性脳損傷患者の社会的行動障害への対応方法に関する研究：家族会代表の視点から

研究課題名（英文）Managing social behavior disorder of patients with traumatic brain injury: Perspectives of representatives of family associations

研究代表者

鈴木 雄介（Yusuke, Suzuki）

湘南医療大学・保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻・教授

研究者番号：00784232

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本邦最大規模の高次脳機能障害者家族会の代表者12名に対し、外傷性脳損傷患者の社会的行動障害への対応方法に関するインタビュー調査を行った。得られたインタビューデータから、社会的行動障害への対応方法に関する内容のみを一まとまりとし、「意味の類似性による分類と命名」の作業による質的分析を行った。1.対応の基本は向き合い過ぎずに向き合う、2.社会的行動障害に対する正しい知識の獲得、3.当事者のやりたい・やるべきことの開発、4.家族会に参加して情報や体験を共有する、5.当事者の家族以外とのかかわりを増やす、6.家族や支援者で役割分担しつつ指示は一方向に情報は一本化する、という6つの概念が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インタビュー内容は、あくまでも著者とインタビュー対象者との関係性の中で発言されたものであり、かつ解析に関しても著者個人による「意味の類似性による分類と命名」の作業による質的分析をしている。そのため、決して一般化できる結果や解釈ではないことを自認している。ただ、数量化された結果には見られない、対象者の「生の声」は支援者にとって一考に値する内容であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Methods to deal with social behavior disorder of patients with traumatic brain injury (TBI) were examined based on interviews of 12 representatives from the largest family associations for higher brain dysfunction in Japan. A qualitative analysis of the methods to deal with social behavior disorder collected from the interviews was performed to categorize and name the findings based on semantic similarity. Six concepts were obtained: 1) Avoiding excessive involvement to prevent conflicts with the patient; 2) Acquisition of correct knowledge of social behavior disorder; 3) Development of an approach that matches the hopes and abilities of the patient; 4) Participation in a family association to share information and experience; 5) Increased relationships between patients and people other than their families; and 6) Integrated information provided by a core supporter who share roles with other supporters and family caregivers.

研究分野：高次脳機能障害

キーワード：高次脳機能障害 社会的行動障害 外傷性脳損傷 家族支援

## 1. 研究開始当初の背景

外傷性脳損傷患者の神経行動学的変化によって家族介護者の多くが抑うつや不安などの心理学的苦痛を抱えていることの根拠が蓄積されている (Perlesz ら 1999)。本邦においても、高次脳機能障害患者の症状が入院中には目立たないなどの理由で、医療や福祉の谷間に落ちてしまっているということが社会的な問題となり、厚生労働省は 2001 年からの 5 年計画で高次脳機能障害支援モデル事業を実施し、診断基準や評価方法、訓練方法などのガイドラインが完成した (中島 2006)。現在では各都道府県に支援拠点機関を設置するなど、患者への支援は拡充の途上にある一方、介護者への支援は十分になされているとはいいがたい状況が続いている。そのような現状を踏まえ著者らは、先行研究 (鈴木ら 2009) において、在宅高次脳機能障害者の家族介護者の介護負担感や精神的健康度と、患者の高次脳機能障害の症状との関連を統計学的に分析した。結果、「興奮する、大声を出す、暴力を振るう」、「思い通りにならないと、決まって大声を出す」、「他人に付きまどって迷惑な行為をする」、「不潔行為やだらしのない行為をする」といった社会的行動障害が家族介護者の精神的健康に影響を与えていることが明らかとなった (表 1)。また、関連する研究 (鈴木ら 2010) で、外傷性脳損傷患者の発症から現在までの介護期間と家族介護者の精神的健康度には負の相関関係があることを明らかにした。

社会的行動障害は、記憶・注意・遂行機能の障害と異なり、明確な認知リハビリテーションや対処の仕組みが解明されていないだけでなく、医療制度と施設利用などでの対応が著しく困難な障壁が存在する (原ら 2017) とされ、日本高次脳機能障害学会学術総会でもシンポジウムや教育講演のテーマに複数回取り上げられ、近年、特に注目すべき問題となっている。著者らはこれらの現状に先んじ、当事者の社会的行動障害に悩みを抱える家族介護者に対して、当事者とのコミュニケーション方法の習得を目的とした介入プログラムを開発し、抑うつや不安の軽減に対する有効性を報告した (鈴木ら 2012)。この研究でも当事者の社会的行動障害が家族介護者とのコミュニケーションを難しくさせている要因 (表 2) となっていることを確認した一方で、「介護期間が長い家族介護者の方が当事者の社会的行動障害に上手く対応できている」という事実も再確認した。

## 2. 研究の目的

以上の観点から、「介護期間の長い家族介護者は、社会的行動障害への対応方法に関する知見を有しているのではないか。そしてそれは現在、苦悩の中にいる家族介護者にとって非常に有益な知見なのではないか。」という問いに至った。

本研究の目的は、家族介護者であり、かつ家族会会員から数多くの相談対応を経験している全国の高次脳機能障害者家族会の代表者に対して個別インタビュー調査を行い、家族介護者側から見た外傷性脳損傷患者の社会的行動障害への対応方法を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

### 1. 対象

インタビュー調査対象者は、本邦最大規模の高次脳機能障害者家族会である「NPO 法人日本高次脳機能障害友の会 (旧：日本脳外傷友の会)」の正会員団体の代表者のうち、以下の調査内容に文書で同意を得た 12 団体の代表者 12 名とした。

### 2. 対象者への倫理的配慮

研究の趣旨、プライバシーの保護について文書で説明した上で承諾の得られた方を対象としてインタビュー調査を実施した。尚、本研究は湘南医療大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した (承認番号：医大研倫第 185-002 号)。

### 3. インタビュー調査方法

調査項目は、(1) インタビュー対象者の基本特性 (性別、年齢、家族会代表の期間)、(2) 外傷性脳損傷患者の社会的行動障害への対応方法について家族会会員にアドバイスしている内容について個別に 60～80 分程度の半構造化面接を実施し、対象者の承諾を得たうえで発話内容を IC レコーダーに録音したものを逐語録とした。インタビュー時間は合計 744 分 (30 分～108 分、平均 62 分)、文字数は合計 94,881 文字であった。

### 4. 解析

外傷性脳損傷患者の社会的行動障害への対応方法に関わる視点を整理し、構成要素や概念を抽出するために、KJ 法の手順 (舟島 2007) を参考にして「意味の類似性による分類と命名」の作業による質的分析を行った。結果の解釈は、どのような概念が得られるかは未知であるが、概念ごとに検討していくことで、アンケート調査などの数量化された結果には見られない、詳細で対象者に共通した事柄を導き出し論考していく。

## 4. 研究成果

### 1. 対象

得られたインタビューデータから、社会的行動障害への対応方法に関する内容のみを一まとまりとし、「意味の類似性による分類と命名」の作業による質的分析を行った。1. 対応の基本は向き合い過ぎずに向き合う、2. 社会的行動障害に対する正しい知識の獲得、3. 当事者のやりたい・やるべきことの開発、4. 家族会に参加して情報や体験を共有する、5. 当事者の家族以外との

かわりが増やす,6.家族や支援者で役割分担しつつ指示は一方に情報は一本化する,という6つの概念が得られた。

## 2. 考察

医療・福祉・教育などの関連職種からの家族に向けた社会的行動障害への対応方法はパンフレットなどが散見される(広島県高次脳機能障害地域支援ネットワーク 2008)が,今回,長年家族会を運営してきて,多くの家族からの相談を受ける立場の代表者から得られた知見は,多くの家族が抱える問題を直に見聞きし,親身になって対応してきた方々からでしか提案されない大変有益で,参考になる内容ばかりであった。

大塚ら(2005)は自らの体験や多くの当事者・家族のピアサポートの体験を通して「在宅生活にあたっては,その人が何を必要としているのか,それにはどう対応をすべきかを考え,悩むことが対処方法を生み出す」と述べ,「別人になってしまったように見えても,元々の特性がまったく失われているわけではないので,本人にあった方法は家族が見出すことも多い」と家族による粘り強いサポートの重要性を述べている。

最後に,ある対象者の印象的なコメントを以下に記す。「支援マニュアルが大事だっていう話,こういう風に対応決めてくださいということではなくて選択肢が欲しいんです。アイデアが欲しいんです。その支援をしてポシャッタ時(うまくいった時)に次の手に何かがあるか,どういいう支援ができるのかと言われたときに,なかなか自分たちだけで絞り出すのは難しい。これって量的な研究では解決できなくて,ケーススタディーを積み重ねるしかないかなど。こういう風にすればうまくいくとか,こうしたけどダメだったけど,こうしたらいいとか,そういうことをケースとして集約して,こういう対応もある,こういう対応をしたら上手くいった,こういう対応は全滅だったとか,そういうことをマニュアルの中で入れておいてもらえると。僕は遂行機能障害はこう対応してくださいとか,そういうのが欲しいのではなくて,次に試せる手を参考にさせてもらいたいというのがすごくあります。他のところでうまくいっている僕らの知らないことって山ほどある。そういうのが最高のマニュアル本だと思います。」と述べている。著者も本研究を始めるにあたり,社会的行動障害への統一的な対応方法がないかを模索していたが,本研究を通し,教科書的な対応方法を列挙するだけでは解決に至らないことを痛感した。月並みな表現となるが,真に求められるのは,「家族介護者同士の交流の場にあらゆる支援機関が寄り添い,共に考えトライアンドエラーを繰り返し,その時々に対応方法を考えていく。そして,その知見を可能な限り皆で共有していく」という結論に至った。なお,今後の課題として現在,知見の蓄積と必要な方が必要な時にそれらの知見に到達できるシステム作りの方法について検討している。

## 文献

- 1) 舟島なをみ: 質的研修への挑戦 第2版. 医学書院. 東京. pp.110-130. 2007.
- 2) 原寛美, 中島八十一: 高次脳機能障害: 社会的行動障害の支援と展望. 高次脳機能研究 37 巻 3号, pp.33-34, 2017.
- 3) 広島県高次脳機能障害地域支援ネットワーク: 高次脳機能障害とともに ご家族の方へ. <https://www.rehab-hiroshima.org/wp/wp-content/themes/rehab/img/kojino/pdf/kazoku.pdf> 2008.(cited 2022.10.11)
- 4) 中島八十一: 高次脳機能障害支援モデル事業について. 高次脳機能研究 26 巻 3号, pp.263-73, 2006.
- 5) NPO 法人日本脳外傷友の会: 日本高次脳機能障害者生活実態調査. 2009.
- 6) 大塚由美子, 石田暉編: 頭部外傷. 医歯薬出版. 東京. pp.195-207. 2005.
- 7) Perlesz, A., Kinsella, G., & Crowe, S.: Impact of traumatic brain injury on family: a critical review. *Rehabilitation Psychology*, 44(1), pp.6-35, 1999.
- 8) 鈴木雄介, 元村直靖: 在宅高次脳機能障害患者の介護者の精神的健康度と介護負担感を含む関連因子の検討. *作業療法* 28 巻 6号, pp.657-668, 2009.
- 9) 鈴木雄介, 種村留美, 元村直靖: 在宅外傷性脳損傷患者の介護者における精神的健康度と関連要因. *厚生指針* 57 巻 4号, pp.20-26, 2010.
- 10) 鈴木雄介, 種村留美: 外傷性脳損傷患者の家族介護者の心理的苦痛の軽減に向けた介入プログラムの効果. *高次脳機能研究* 32 巻 1号, pp.38-46, 2012.
- 11) 瀧澤学: 高次脳機能障害者家族の介護負担感に関する研究～高次脳機能障害者の親へのインタビュー調査より～. *医療社会福祉研究* 第 21号, pp.115-125. 2013.
- 12) 生方克之: 当事者会とソーシャルワーカー. *地域リハビリテーション* 4 巻 3号, pp.229-232. 2009.
- 13) 上坂順子: NPO 法人日本脳外傷友の会編. 高次脳機能障害とともに. せせらぎ出版. 東京. pp.48-52. 2010.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木雄介	4. 巻 40
2. 論文標題 外傷性脳損傷患者の社会的行動障害への対応方法に関する研究：家族会代表の視点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高次脳機能研究	6. 最初と最後の頁 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2496/hbfr.40.92	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木雄介，須鎌康介
2. 発表標題 持続的注意機能の客観的評価に対するポータブル脳波計の有用性の検討
3. 学会等名 第54回日本作業療法学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木雄介，須鎌康介，生田宗博
2. 発表標題 ミラーセラピーによる錯覚的な視覚フィードバックと運動イメージとの関係性：予備的検証
3. 学会等名 第57回日本リハビリテーション医学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木雄介
2. 発表標題 外傷性脳損傷患者の社会的行動障害への対応方法に関する研究：家族会代表の視点から
3. 学会等名 第43回日本高次脳機能障害学会学術総会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------